

論文審査の結果の要旨

論文題名

マンガ版『風の谷のナウシカ』における生成論的研究
ーコミックス成立時における改稿から見た作品分析ー

論文審査の要旨

①論文の概要

本論文は、世界的に著名なアニメーション監督・宮崎駿の『風の谷のナウシカ』（劇場版アニメーションは1984年3月公開）マンガ版（「アニメージュ」1982~94年連載）の成立過程を、雑誌連載版と単行本版の改稿による異同を精査することによって明らかにしたものである。

著者の専門領域である文学研究では、初出連載と単行本など、同一の作品の改稿による異同を研究することは、もっとも基礎的な研究方法である。が、長く民間の研究者を主体に、おもに商業媒体での批評を中心に発展してきた日本のマンガ研究では、いまだにこうした厳密な研究方法は確立していない。著者は、改稿の異同を網羅的に精査する研究を「生成論」とし、マンガ研究への導入を試みた。

この研究方法によって、先行研究では触れられてこなかった連載と単行本の差異から、マンガ版『風の谷のナウシカ』（以下『ナウシカ』）の主題の成立と変移を分析し、表現論的な側面と物語論的な側面、および「倫理」的な問題から分析をおこない、主題の変化と確立の時期を推定した。また、その段階的な主題深化の過程と、歴史社会的な事象との関連を追及した。

本論文は、マンガ論研究領域に、学術的形式による改稿分析という、あらたな研究方法を導入し、その必要性を主張したものである。

②論文の構成

本論文の構成は、序論、結論部を除いて3部構成となる。

本文は全266ページで、膨大な量の改稿部分の比較図版と分析を含む2章は173ページに及び、論文の大半を占める。他に、連載期間と休載期間の表、マンガ表現の「漫符」「効果」などの使用頻度を単行本各巻ごとに計量化した表、各巻ごとの改稿状況表、加筆個所一覧などの表を適宜挿入し、実証性を高めている。

序論では、宮崎のアニメ「職人」としての像と、世評のもたらす「文化人」「思想家」の側面を指摘し、集団制作・商業的制約の条件下にあるアニメーションよりも、マンガ作品のほうに「思想家」宮崎像があらわれるとする。

アニメ版『ナウシカ』の結末を否定して成り立つマンガ版の思想的主題（アニメ版の、人間の汚した世界を生態系が浄化するという主題を、すべてが人工的なユートピア的救済システムであったとした上で、それを主人公が破壊するに至る）をマンガ版の「どんでん返し」にみて、その着想確立時期の実証的確定を課題として述べ、この過程の変移をめぐる問題は宮崎の作品群を貫く研究主題となるとする。

宮崎駿という作家と作品のもつ多面的な主題をとらえて、刺激的である。

第1章は、作品成立当時の時代の影響を検証し、宮崎駿の、おもにマンガ作品の系列の中でマンガ版『風の谷のナウシカ』を位置づけ、おおまかな主題の成立過程を描く。

1986年4月のチェルノブイリ原発事故とその後のソ連邦崩壊、冷戦構造終結への流れが、左翼的立場をとっていた宮崎に与えた影響を重視。また、宮崎本人の、ユーゴスラビア内戦に衝撃を受けたとの証言を引き、「マルクス主義ははっきり捨てた」との「転向」宣言を紹介。しかし、古典的な意味での左翼転向とみなすべきかどうか疑義を呈し、宮崎個人の人間観の変化に注目する。

またマンガ表現論の方法によって、絵（線）、コマ、言葉の三要素の解析を、宮崎のマンガ作品系列中心に行い、現在の日本の物語マンガと異なる方法意識を指摘し、物語の時間構造が、直線的なものから円環構造へと変化したことを指摘する。

第2章は、連載版と単行本版の精密な差異の比較を通して、マンガ表現と主題の成立過程を改稿分析する。

冒頭「生成論」研究の背景をテキスト論との関連で解説し、マンガ研究における同アプローチの必要性和今後の重要性を指摘。改稿の種類を「加筆」「さしかえ」「描き直し」「挿入」「台詞等」に分類し、刊行巻（1~7巻）ごとにコマ数、ページ数、個所数で数え、表を作成。全体で「加筆」1130コマ、「さしかえ」89コマ、「描き直し」59コマ、「挿入」50ページ、「台詞等」の変更135個所に及ぶと指摘。

論者によって主張の異なる「どんでん返し」の着想時期を、具体的な改稿分析の結果をもとに1984年後半~1987年初頭にかけて次第に形を成したものと推論。その背後に、人間の愚かさへの認識から「ニヒリズムによるニヒリズムの超克」を目指したとのテーマを見出す。

詳細で客観的な実証研究をもとに思想的主題の形成の分析を志した点は評価される。

第3章は、1、2章で得られた知見をもとに、先行研究を検討し、「マンガ表現論」と「物語論」、「倫理の問題」の3領域について検証。さらに手塚治虫と宮崎の関係を論じた。

表現論では、安部幸広、久美薫の論を検討。久美の研究のコマの「つなぎ」による映画的表現の分析を高く評価し、『ナウシカ』の結末を「クリエイター」としての宮崎が「文化人」としての自身を抑えた結果とする観点を紹介、評価する。「物語論」では、小山昌宏の指摘した「語り」の問題系を評価。「倫理」問題は、稲葉振一郎の論から「メタ・ユートピア」としての『ナウシカ』議論を紹介、長谷正人の論を引き、宮崎像の「分かりにくさ」と、それぞれの「見え方の違い」に言及。夏目房之介の論からは、手塚から戦後マンガ史の流れの中で、戦後

マンガの「生命倫理」の「現在」として『ナウシカ』を問う観点を指摘。

また各論者の「読みにくさ」「読みやすさ」の印象を整理し、目に見える手法上の問題と、目に見えない物語上の了解を区別しつつ、全体として宮崎自身が「読みにくくするために」改稿したと語ったにも関わらず「読みにくく」はなっていない、むしろ逆であると結論づける。さらに宮崎の社会主義への失望や母との関係を検証、「どんでん返し」の主題は、もともと宮崎に胚胎したニヒリズムとの闘争という形で次第にあらわれたものとする。

作家・作品を巡る多角的な観点と、それぞれの問題系を析出し、ややまとまりに欠けるものの、広い視野から問題を多層的に提起する姿勢が評価される。

結論部では、「文化人」「思想家」としての宮崎像の成立を問い、宮崎自身が「転向」と呼んだ自身の現象を作品の時間構造の問題として示唆し、「生成論」分析方法のマンガ研究への応用を提唱して終える。

冒頭、2013年9月の宮崎駿引退宣言に触れ、宮崎をここまで「世界的な作家」に仕立て上げた鈴木プロデューサー（『ナウシカ』連載時は担当編集者）の重要性を強調。次に論文の検証過程を振り返り、『ナウシカ』にいたる宮崎作品の物語の円環する時間構造への変化は、キリスト教的・マルクス主義的な直線的時間から、生活実感の「身体的思想」への帰還＝「転向」と平行な変化として獲得されたとする。マンガ版『ナウシカ』の結末に、ユートピアを否定するニヒリズムと、同時に人間と世界の肯定を見る。

「作家」「職人」と「文化人」の対立については、後者が鈴木プロデューサーによって戦略的に構築されたものとして相対化し、「過剰な思い入れ」で「時間と空間」をいくらでも引き延ばしてしまう「日本文化の基調」が、日本映画やマンガにあると見る宮崎の発言を紹介、そうではないマンガを描こうとした宮崎の意図を語る。

本論文は、実証的研究によるマンガ研究方法論の提起、宮崎駿と『ナウシカ』を巡る様々な表現上及び思想上の諸問題の掘り起こしと検討、その基盤にある時間構造の問題を解析した成果をもって評価される。

審査過程では、論文で提出された問題系が多岐にわたり、すべてが効率的に解明されているわけではない点が指摘されたが、実証研究、論述の手続きとしての手堅さ、ともすると退屈になりがちな実証研究論文でありながら、文章のわかりやすさなどが高く評価され、査読者から一致して博士号取得の基準を十分に満たしているものと認められた。今後、マンガ研究の中でさらに明確に方法論として位置付ける作業が期待される。

論文審査委員： 主査 夏目房之介 教授
中条省平 教授
佐々木 果 非常勤講師